

途上国アルバム：ベオグラードのエトランジェ

鈴木博明

世界銀行都市開発コンサルタント

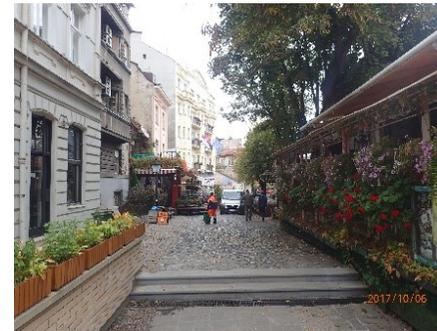
2017年の10月、マニラのADBでの開発利益還元に関するワークショップを終え、トルコ航空の夜行便でベオグラード（セルビア共和国の首都）へ向かった。アジアの喧騒の名残りは、イスタンブール空港のビジネスラウンジまでで、朝早く到着したニコラ・テスラ空港は閑散としていた。南欧とは言え、外は少し肌寒いぐらいだった。公共交通指向型開発の視点から、ベオグラードの都市交通マスタープランについてのアドバイスを行うミッションだった。世銀オフィスが寄越してくれた車で市内に向かった。眠い目をこすりながら、窓越しに町の景観を見た。車は郊外から、サバ川左岸にあるブルータリズム的な建造物が多数築かれ、巨大なモニュメントのような街並みの続くノヴィ・ベオグラードを通り抜け、サバ川を越え、世銀オフィスと宿泊先のメトロポールホテルのある旧市街に向かった。30分の間に、社会主義国家が計画的に作った新都心と千五百年の時間をかけて作られた旧市街の両方を垣間見ることができた。



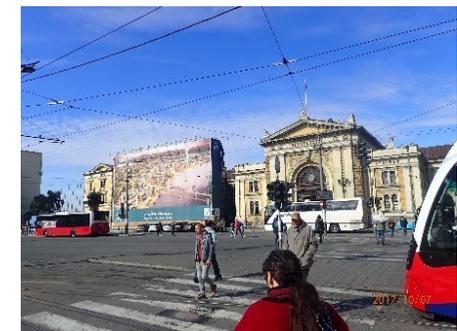
ノヴィ・ベオグラード



市電の通っている旧市街



レストラン街



旧駅舎

橋を通過する時、ベオグラードで今一番話題になっている、サバ川右岸のウォーターフロント再開発のサイトが見えた。市は、古い国鉄の駅とレールヤードを取り壊し、跡地を再開発する計画を進めている。アラブや中国の資本が参加し、ファイブスターホテルや高級コンドミニアムの建設が進んでいる。BBCによれば、開発の在り方をめぐって、市当局と市民団体の間に軋轢が生まれている様だ。駅舎は、ベオグラードの歴史を刻む美しい建造物で、取り壊さず、美術館か博物館にでも再生したら、高級コンドミニウムに手の届かない一般市民にとっても、親しみやすい開発になるのではないかと思われた。ガイドブックにあった、アートギャラリーの多かった一角も開発の波で消えてしまった様だ。

都市交通マスタープランのセミナーは、市庁舎の会議室で行われた。歴史を感じさせる、重厚な建物の外見に比べ、建物の中は天井が

高く広いだけで、他の古いヨーロッパの町の市庁舎で見られるような、歴史を物語る、絵画や彫像や、タピストリーのような、装飾品はあまり見受けられなかった。これは、社会主義の政権が長く続いたためか、最近のコソボ紛争による政情不安によるものかは、私には分からなかった。市電の走っている落ち着いた旧市街を歩いていると、否が応でも、コソボ紛争の傷跡が目に入ってくる。NATO の爆撃により破壊されたビルはそのまま保存されているし、美しくライトアップされた、連邦議会議事堂にも、様々な政治スローガンが、壁を埋めつくしていた。経済的には EC との統合を希望しながらも、政治的にはまだ過去の軛から簡単には抜けきれない、セルビアのディレンマが感じられる。



ウォーターフロント再開発



再開発の模型



NATO に空爆されたビル



連邦議会議事堂と政治スローガン

ベオグラード都市圏の人口は増加しているが、高齢化の波が押し寄せている。ニコラ・テスラー博物館のあるベオグラードも、欧米先進国への頭脳流出が続き、市の開発担当者は、若い人達をどうやってベオグラードに引き留めるのかに頭を悩ませている。町を歩いていると、建設途中でストップしたプロジェクトのサイトが散見される。ウォーターフロント開発後に使われるベオグラード首都新駅も、かろうじて地下のプラットフォームは完成したが、コンコースも駅ビルも出来ていない。ウォーターフロントの再開発からは、コソボ紛争の負の遺産を払拭し、何か新しいものを、資金力のあるアラブや中国のデベロッパーに頼って、早急に実現したいという、過去の失敗を見てきた為政者の意図が感じられる。しかし、それが本当にベオグラード市民の為になるのかは分からない。

週末に、旧市街の丘陵地にある、ドナウ川とサバ川の合流点を見下ろす軍事拠点であるカレメグダン城址公園に登ってみた。公園から眼下に広がる二つの中洲は「大戦争島」、「小戦争島」と呼ばれている。この公園の中に、軍事博物館がある。軍服の展示を見ているだけでも、この地で過去 150 回を超える戦いを経て、ギリシャ、ローマ、ビザンチン、オスマン、セルビア、オーストリア帝国と、様々な人種と国が入り乱れ、建国と支配の歴史が繰り返されて来たことが分かる。敗戦まで、他国の支配を経験しなかった、我々には想像を絶する世界だ。



軍事博物館があるカレメグダン城址公園

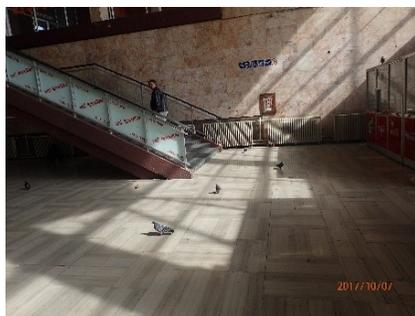


「大戦争島」、「小戦争島」



軍事博物館

ベオグラードの滞在で少し重苦しい気分になったので、翌日美しい聖堂で知られるセルビアの古都、ノヴィ・サドを訪ねてみることにした。ホテルのコンシェルジュからワイナリー見学付きのリムジンツアーを勧められたが、駅から30分おきに出ている乗り合いバスで行くことにした。1時間半ほどで、バスは町外れにあるノヴィ・サド駅に着いた。駅舎は閑散としており、ホコリのたまった待合室にハトが遊んでいた。駅から町の中心へはバスで10分ぐらいだった。ノヴィ・サドは、聖堂を中心としたきれいな中世の町で観光客で賑わっていた。日曜であったためか、ツーリストインフォメーションオフィスは閉まっていた。表通りの観光客を避け、裏通りを歩いてみた。静かな道に、セルビア正教の教会があり、地元の人が結婚式を祝っていた。ここでは静かな時間が流れていた。



ノヴィ・サドの駅舎



ノヴィ・サドの大聖堂



裏通りのセルビア正教の教会

週末を含む、僅か数日の滞在であったが、ベオグラードには今までに訪ねたどこの町とも違った印象を持った。アジアの大都会の喧騒は見られず、地中海やラテンアメリカの町の陽気さもなく、アフリカの町の熱気もない、華やかなパリやロンドンとは違った東欧の古都ベオグラードでは、歴史を超え静かに流れていく時間と現代の出来事が交錯している。この二つがどのように折り合いを付けているのかが理解できないもどかしさを感じた。来た時と同じで、出発も早朝であった。ハンブルグ行きのルフトハンザで眠気覚ましのエスプレッソを飲みながら、少し疲れを感じたのは世界一周の旅や仕事の為ではなかったかもしれない。